

「水曜サロン with 赤堀会長」第6期 第8回(通算83回)

幼いギフトド児をつなぐオンラインプラットフォーム～「Kids Academia」の事例～

1. 内容

○「Kids Academia」について

- ・2010年に愛媛大学でスタート
- ・対象は幼稚園年長から小学校2年生
- ・コロナ禍を経て、対面形式からオンライン形式に移行し、全国から参加可能に。約200名。

○参加している子供たちの特性

- ・高い知的好奇心を持っており、必ずしも一つの特定分野にこだわるというわけではなく、興味は広がっていく。
- ・集中力と持続力を持っており、長時間にわたって一つのテーマを掘り下げて考えることができる。
- ・高い知的好奇心とすでに得た知識の高さゆえに、日常の話し相手がいない。

○サマースクールでの活動事例「音であそぼう」

- ・糸電話(幼稚園では生物系の活動は多いが物理系が少ない)
- ・体験後、次の実験を子ども自身が計画。糸を替える、コップの大きさを替える、ゴムでやる、糸電話を水につける……。どんどんアイデアが出てくる。

○ウィンタースクールでの活動事例「ChatGPTをつかってみよう！」

- ・質問に応じて回答が変わることを体験
- ・「回答がすべて正しいと思わないようにする」「自分で考えなくなるのはおもしろくない」などの留意点も子供たちから出てくる能力が高い子供は公正であることに過敏なので、社会的、倫理的、法的課題について議論するのに有効
- ・周りに話し相手がいない時に、居心地良い居場所になり、社会的、心理的発達の支援につながる。

2. 所感

幼い子供たちが豊かな発想力で考えたり、30枚ものレポートを仕上げたり、大学生顔負けの知識や思考力を有している状況をお聞きして、驚くことばかりでした。

そのような中で最も印象的だったのは、質疑応答の中での「答えが決まったような問題を解きながらレジリエンスを身につけようというのは無理がある。自由研究、課題研究あるいは社会課題の解決に挑戦する中でレジリエンスは育つ。」というお話でした。学校教育において「個別最適」ということが考えられるようになってはきたものの、やはり集団での学習・行動が求められ、得意・苦手はあるにしても全教科取りこぼさずに習得することが求められているのが現状です。だれもが幼い時からやりたいこと、強い興味を抱くことをもっているわけではありませんので一般化するのは難しいかもしれませんが、強い興味関心の対象が見いだせたときから、各教科決められた時間を学ぶことから離れて、自分の関心事を追求するような学びに変わっていけるようなカリキュラムができないものか、と考えてしまいました。壮大な実験かもしれませんが、不登校が増加している問題の解決に向かえる可能性もあり、また、AIやロボットの時代に社会が求める才能を育むためにも、まさに今が日本の学校教育の転換点かもしれないと思いました。

隅田先生、貴重な事例のご紹介をいただき、ありがとうございました。